The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中井竹山の儒者意識 : その経学研究を手がかりとして
Author(s)	藤居, 岳人
Citation	懐徳堂研究. 2012, 3, p. 27-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中井竹山の儒者意識―その経学研究を手がかりとして―

藤居岳人

はじめに

中井竹山は、江戸時代中期から後期にかけて、大坂における幕府官許の学問所懐徳堂の第四代学主として活動した儒者である。懐徳堂の全盛期を弟の中井履軒とともに二人で支えた。両者の学問の特徴について、西村天囚は次のように言う。

懐徳堂創立の比には、道学を主として詩文を排斥せしも、蘭洲文章に長ぜしより、其が教授と為りて後は、学風一変して詩文を課し、竹山履軒並に文章に長ぜしが、分けて文章は竹山の長技たり、竹山の文章に長じ、履軒の経学に長ぜしは、並に淵源を蘭洲に発して、而して其の造詣は師に勝ること数等、真に是れ出藍なり、（西村天囚『懐徳堂考』下巻、三、兄弟の師）

つまり、二人はともに五井蘭洲の弟子だけれども、竹山が文章に長じていたのに対して、履軒は経学に長じるようになり、それぞれに学問の得意とする分野が相違するようになったと紹介されている。天囚の文章からもわかるように、懐徳堂の経学に関する業績は、『七経逢原』などの経書注釈に代表される履軒の経学研究に焦点が当たりがちである。それに対して、履軒に比べれば竹山の経学に関する研究は確かに多くない。これは竹山が懐徳堂学主としてその運営の中心的存在だったことも大きな理由のひとつだろう。竹山は大坂の町における懐徳堂の地位を確固たるものにする必要があり、そのために、大坂在勤の諸大名や町奉行などの幕府の役人、あるいは諸藩の武士たちとの交流を深めるための諸活動に忙殺されていた。したがって、経書研究に打ち込むまとまった時

間をとることは恐らく難しかっただろう。

とは言え、竹山の経学研究が全くないわけではなく、例えば、荻生徂徠の『論語徴』を批判した『非徴』は竹山の名を高くさせた著名な書である。この『非徴』以外に、竹山には『易断』や『礼断』などの五経に関する著述があるのに加えて、四書関連の著述として大阪大学附属図書館懐徳堂文庫に『四書断』が残されている。これは『四書集註』の刊本の余白に竹山自身の学説や諸註釈家の学説を書き入れたものであり、そのなかの『中庸断』では、経学に関する懐徳堂儒者の学説として著名な中庸錯簡説も見ることができるから、竹山の経学に対する考えをうかがう代表的な著書と言って良いだろう。

ただ、『四書断』に見える竹山独自の学説は何も中庸錯簡説のみとは限るまい。本稿では、従来、取り上げられることの少なかった竹山の『四書断』を材料として、中庸錯簡説以外の竹山の経学研究の特徴を探りたい。その注釈の形式が履軒の『七経雕題』と同様に刊本の余白に自説などを書き入れる体裁であることから、履軒の『雕題』とも比較しつつ考察を進めることにする。なお、本稿では、論点の分散を避けるために『四書断』のなかの『論語断』を特に取り上げる。そのうえで儒者としての竹山の立場を明らかにしたい。

一、『四書断』書き入れの特徴

『懐徳堂文庫図書目録』（大阪大学文学部編、一九七六年）によれば、『四書断』の刊本について、「高頭四書集註二十巻　南宋朱熹撰　六順堂黄振宇刊本　日本五井藤九郎中井積善首書批点　懐徳堂遺書　闕論語集註巻第一至巻五」とあり、『四書集註』の刊本を底本として、竹山の書き入れ以外に、竹山の師である五井蘭洲の書き入れも存すると記されている。「懐徳堂水哉館遺書遺物目録」（『懐徳』十七号、懐徳堂堂友会、一九三九年所収）における吉田鋭雄の『四書断』の解説では、「是の書もと五井蘭洲先生の蔵本であったのを、竹山先生之を譲受けたものか、欄外に蘭洲先生自筆の書入あり、竹山先生は其の空白の処に諸儒の説及び自説を朱墨両様にて掲げ、『善按』若(もし)くは『竹山曰』としてある」とある。つまり、『四書断』の書き入れのある刊本は、もともと五井蘭洲の蔵本だったものを竹山が譲り受けたもののようで、欄外に蘭洲自筆の書き入れがあり、竹山はその余白に諸儒の説や自説を書き加えているのである。したがって、竹山説を検討するには、まず、蘭洲の書き入れと竹山の書き入れとを区別する必要がある。それでは両者は

どのようにして区別できるのだろうか。『論語断』のなかから区別するための用例を取り上げてみる。

まず、「某按」や「禎按」とあるものは蘭洲の書き入れである。「禎按」とあるのが蘭洲の書き入れであることは蘭洲の名が純禎であることからわかるけれども、「某按」はなぜ蘭洲の書き入れなのか。それは「某按」とある書き入れの何條かが中井履軒の『論語雕題』や『論語雕題略』に蘭洲説として引用されているからである。

例えば、顔淵篇（六、十一裏〔『四書断』の書き入れのある『四書集註』巻六、十一葉裏。以下、同じ〕）「顔淵曰く、其の目を請い問わん、と。子曰く、非礼は視ること勿れ、非礼は聴くこと勿れ、非礼は言うこと勿れ、非礼は動くこと勿れ、と。顔淵曰く、回は不敏と雖も、請う斯の語を事とせん、と」の箇所の『論語断』に、「某按、四勿猶言視聴言動。勿以非礼也。非礼皆属己。四箴以蔽邪為言、則似以非礼為外。此処須詳審程子之意」とあり、『論語雕題』の同箇所に、「洌庵先生云、四勿猶言視聴言動。勿以非礼也。非礼皆属己」とある。「洌庵先生」とは蘭洲のことだから、この場合は『論語断』の一部分が『論語雕題』に引用されていることがわかる。

上述の例を見れば、履軒が蘭洲の書き入れのある『論語断』の刊本を参照しつつ『論語雕題』を記したのではないかと考えられる。しかし、同じ顔淵篇（六、十三裏）「司馬牛憂えて曰く、人皆兄弟有り。我独り亡し、と」の箇所に対して、『論語雕題』では、「洌庵先生云、疑此司馬牛兄弟皆死亡後之話」とあるにもかかわらず、『論語断』の刊本には蘭洲の書き入れは見られない。このことから、履軒が参照したのは『論語断』の刊本ではない可能性が高い。[1] 恐らく、現在は散逸しているけれども、漢文で執筆された蘭洲独自の『論語』の注解が別に存在したのだろう。[2]

上述のように、「某按」は蘭洲による書き入れである。したがって、無記名であっても、「某按」や「禎按」と同じく、墨筆で記された筆太の書き入れは、その筆勢から蘭洲のものである蓋然性が高い。図一は『論語断』（憲問篇の七、九裏）である。この例で説明すれば、「孔安国曰」とあるものは、無記名だけれどもその隣の「某按」と筆勢が同じだから、蘭洲の書き入れだと推定できる。

次に竹山の書き入れについては、上述の吉田鋭雄の解説にもあるように、「善按」や「竹山曰」とあるものは竹山による書き入れである。「善按」とあるのは、竹山の名が積善であることから、竹山の書き入れであることがわかる。それら以外に、無記名ではあるけれども朱筆や墨筆で記された書き入れは、その筆勢から竹山の書き

図一

図二

入れだろうと推定される。図二も『論語断』（顔淵篇の六、十五表）である。このなかの墨筆で「東涯曰」とあるものや朱筆で「朱子曰」とあるものは竹山による書き入れだろう。

二、『論語断』の特徴

以下、『四書断』中の『論語断』について、その内容的な特徴を見てゆくことにする。『論語断』は、その書き入れのある『論語集註』の刊本が巻一から巻五まで散逸しており、巻六から巻十までのみ、すなわち先進篇から堯曰篇までのみが懐徳堂文庫に所蔵されている。刊本への書き入れという体裁が竹山の『論語断』と履軒の『論語雕題』とは同じだから、両者の書き入れの様相を比較することで、両者の経書解釈の特徴もある程度うかがうことができる。内容的な面は後述するとして、まずはどのような諸儒の説をどの程度引用しているのか、あるいは自説はどの程度記しているのか、といった点について主に引用される諸儒名と引用数とを表一にまとめた。[3] 引用される回数が多いからと言って、必ずしもその儒者の説の正当性を竹山が認めているとは限らないけれども、表の数字によって竹山の考えの方向をある程度推し量ることは可能だと考える。

表一によって、竹山と履軒との注解の内容を比較すれば、例えば、先進篇で竹山が自説を述べる書き入れが八條であるのに対して履軒は九十條、顔淵篇では竹山の書き入れが九條であるのに対して履軒は九十條と、履軒が自説を述べる書き入れの方が全体を見れば圧倒的に多い。それに対して、竹山の書き入れは、『四書大全』に見える説を引くときが多く、時には『四書或問』の引用もある。つまり、竹山は「朱子曰」と示して朱子の説を引くことが履軒に比べれば圧倒的に多い。例えば、先進篇で竹山の引く朱子説は七條であるのに対して履軒は一條を引くのみで、顔淵篇では竹山の引く朱子説は十五條もあるのに対して履軒は一條を引くのみとなっている。書き入れの量の多寡がその内容の質と相関関係があるとは必ずしも言えない。しかし、ある程度の傾向はこの比較から看取することが可能だろう。すなわち、経学研究に関しては、通説どおりに履軒の方に一日の長があり、独自の見解が多い可能性は高いと言うことができる。

また、上述のように、竹山は『四書大全』や『四書或問』に見える朱子の説を引くことが多いから、基本的に竹山は朱子の解釈に従っていると言える。一例を挙げれば、子路篇（七、八表）「子曰く、中行を得て之に与せ

表一　『論語断』、『論語雕題』引用数比較表（上：『論語断』下：『論語雕題』）

	先進	顔淵	子路	憲問	衛霊公	季氏	陽貨	微子	子張	堯曰
蘭洲	21－0	17－2	17－0	29－2	11－1	11－0	14－2	8－2	9－0	2－0
竹山	8－0	9－0	15－0	17－0	4－0	5－0	6－0	3－0	12－0	1－0
履軒	0－90	0－90	0－80	0－129	0－88	0－63	0－76	0－39	0－68	0－24
仁斎	0－0	1－2	1－0	1－0	0－1	2－1	1－2	1－2	1－0	0－3
徂徠	0－0	0－0	0－0	0－0	0－1	0－0	0－0	0－0	1－0	0－0
皇侃	0－0	0－3	0－0	1－3	0－2	0－1	0－0	0－1	0－0	0－0
張南軒	0－0	1－0	0－0	2－1	2－0	3－0	1－0	1－0	0－1	0－0
朱子	7－1	15－1	5－1	13－1	15－0	6－1	9－0	2－0	12－1	2－0
程子	0－0	2－0	0－0	0－0	1－0	0－0	1－0	0－0	0－0	0－0
張彦陵	2－1	3－1	4－2	4－2	2－0	1－2	5－3	1－1	1－0	2－0
蔡虚斎	3－1	4－6	3－0	2－5	2－0	0－2	3－3	3－0	1－1	1－0
林次崖	0－0	0－0	2－0	0－0	0－2	1－1	0－1	1－0	1－0	0－0
葛屺瞻	0－2	0－4	0－1	0－3	0－3	0－1	0－5	0－2	0－4	0－0
高中玄	0－2	0－0	0－0	1－2	0－0	0－1	0－1	0－0	0－0	0－0
張芑山	1－2	0－0	0－1	1－1	0－2	0－0	0－2	0－0	0－1	0－0

ずんば、必ずや狂狷か。狂者は進んで取り、狷者は為さざる所有るなり」の箇所に、『論語集註』では次のように言う。

…孟子に曰く、「孔子は豈に中道を欲せざらんや。必ずしも得可からざるが故に其の次を思うなり。琴張・曾晳・牧皮の如き者は、孔子のいわゆる狂なり。其の志は嘐嘐然（志の大きいさま）として、古の人、古の人と曰うは、其の行ないを夷考（考える）して焉を掩わざる者なり。狂者も又た得可からざれば、不潔を屑しとせざるの士を得て之に与せんと欲するなり。是れ狷なり。是れも又た其の次なり」と。

朱子は、『孟子』尽心章句下の文章を引いて、孔子がもとめるのは、本来、中行の士（中庸を心得た士）だけれども、それが得がたいために次善の人材として狂者に言及すると述べる。そして、同箇所の『論語断』において、竹山は次のように述べる。

竹山曰く、絶えて中行無きを言うに非ず。其れ必ずしも得可からざるを以てが故に始めに之を置きて以て狂狷を論ずるなり。孟子の狂は此の意を得。（原漢文。『論語断』からの引用は書き下し文にする。以下、同じ）

竹山も朱子と同様に、中行の士が得がたいがために狂狷の士に言及すると述べており、この箇所において竹山は基本的に朱子の解釈を踏襲している。『論語断』では他にも朱子の解釈を踏む箇所が多い。

ただ、『論語断』において、朱子の解釈を批判的に検討している例も見える。例えば、先進篇（六、二表）に「南容　白圭を三復す。孔子　其の兄の子を以て之に妻わす」とある。孔子の弟子の南容が『詩経』抑篇の「白圭の玷くるは尚磨く可し」の箇所を何度も読み返していたという内容である。この箇所について、朱子は『論語集註』と『論語大全』とにそれぞれ以下のように言う。

詩の大雅の抑の篇に曰く、「白圭の玷くるは尚磨く可し。斯の言の玷くるは為む可からず」と。南容は一日に此の言を三復す。事は家語に見ゆ。蓋し深く言を謹むに意有り。（『論語集註』）

朱子曰く、南容　白圭を三復す。是れ一旦に此れを読まず。乃ち是れ日日之を読む。此の詩を玩味して言行を謹まんと欲するなり。（『論語大全』）

ここに掲げた『論語集註』と『論語大全』との間には微妙に内容の相違がある。すなわち、『論語集註』では、南容が白圭を一日のうち何度も反復すると言う。それに

対して、『論語大全』では、南容が白圭を反復するのは一日のうちではなく、日々毎日反復するのだと述べている。その相違について、竹山は『論語断』で次のように言う。

古注に孔曰く、「南容　詩を読みて此に至りて、三たび之を反覆す」と。善按ずるに従う可し。朱子の「日々之を読む」の説、恐らくは非なり。本注の「一日に三復す」、猶是くのごとし。

竹山は、古注、すなわち『論語集解』の説に従って、南容が白圭を一日に何度も反復しているのだと言う。これは『論語大全』ではなく『論語集註』の説に従うということである。このように朱子の解釈に対して、安易に従わず、古注なども参照しながら批判的に冷静に解する側面が竹山にはある。

さらに、『論語断』には朱子の解釈に従わない例も多く見える。例えば、憲問篇（七、十八表）「子曰、君子恥其言而過其行」である。『論語集註』では、「恥ずるとは、敢えて尽くさざるの意なり。過ぐるとは、余り有らんと欲するの辞なり」とあって、本文を「子曰く、君子は其の言を恥じて其の行ないを過ごす」と訓むべきだとする。それに対して、例えば、『論語大全』には、「胡氏曰く、或いは其の言の其の行ないに過ぐるを恥ずると謂うも、固より通ず。必ず集註の釈きて両事と為すが如きは、斯ち夫子立言の本意を得」とあるように、本文を「子曰く、其の言の其の行ないに過ぐるを恥ず」と訓むべきたという説も存した。この箇所の『論語断』では次のように言う。

竹山按ずるに、朱子曰く、「諸説　皆な善し。其の文義を以て之を観れば、則ち当に其の言の其の行ないに過ぐるを恥ずるに作りて、乃ち諸説の意と合すべし。今の文の如くんば則ち恐らくは其れ当に両事と為すべし」と。皇侃本は「而」正に「之」に作る。而して朱子　皇本を覧ること、文集等を見れば証す可し。今　其の言此くの如くんば、則ち其の覧る所の皇本は恐らくは今本と文を異にす。

又た按ずるに皇本の経文の異なる者は少なからず。而れども朱子の未だ嘗て論及せざる者は、特り是の章のみに非ざれば、則ち朱子未だ全本を覩ざるか。

竹山の引く朱子の説は『論語或問』に見えており、朱子もそこで「未だ敢えて旧説に拠らずして、姑く記して以て考えを俟つのみ」と述べており、諸説を認めつつも、それに従うことには慎重であり、解釈の判断を保留している。しかし、竹山は、皇侃本、すなわち皇侃の『論語

義疏』に従って、本文を「君子恥其言之過其行」とすべきだとする。そして、朱子も皇侃本を見ていたはずで、この箇所ももし朱子が皇侃本を見ていたならば何らかの言及があるはずだけれども、その言及がないのは朱子の見た皇侃本のテキストが竹山の見たものと相違する系統のものだったか、あるいは朱子が皇侃本の全本を見ていなかったかのどちらかだろうと推測している。ここから『論語集註』を中心とする朱子の著述に対する竹山の信頼と、それと同程度に、あるいはそれ以上に竹山が皇侃の『論語義疏』を信頼していたことがうかがえる。

さらに『集註』に従わない例として、陽貨篇（九、一裏～二表）「子曰く、性　相近し。習い相遠し」の箇所を検討する。その箇所の『論語集註』は、以下のように言う。

此のいわゆる性は、気質を兼ねて言う者なり。気質の性は、固より美悪の同じからざること有り。然れども其の初を以て言わば、則ち皆な甚だしくは相遠からず。但だ善に習えば則ち善、悪に習えば則ち悪なり。是において始めて相遠くなるのみ。

程子曰く、此れ気質の性を言いて、性の本を言うに非ず。若し其の本を言わば、則ち性は即ち是れ理なり。理に不善無し。孟子の性善を言うは、是れなり。

何の「相近」きこと之有らんや、と。

この箇所は、気質の性と本然の性という朱子学の基本的術語について言及する有名な箇所である。本文で「性相近し」、すなわち、人によって性が相違していると言うのは、気質の性のことを言っているからだと朱子は言う。その朱子の説を敷衍して、程子は、気質の性は人によって相違するけれども、本来、性即理だから、本然の性について言えば、どの人も同じであるはずで、「相近い」という表現にはならないと述べる。

それに対して、『論語断』では次のように言う。

竹山曰く、「相近し」は即ち同じなり、「相遠し」は即ち異なり。人と人と対するが故に「同」と言わずして「近」と言うのみ。即ち孟子の「相似たる」を以て〔『孟子』告子章句上に〕「耳相似たり」とするは是れなり。〔『論語』学而篇の〕「鮮なきかな仁」とは仁無きなり。併せて按ず可し。

朱子が本文の「性　相近し」の「近」を相違するの意と解するのに対して、竹山は、『孟子』や『論語』の例を引いたうえで、「近」を同じの意とする。竹山がこのように考えた理由はよくわからない。ただ、「近」を同じの意と考えるのは竹山だけでなく、履軒も同様だった。履軒の『論語逢原』の同箇所の注解を見れば、以下のよ

うに言っている。

「近」は猶「同」なり。「遠」と対す。故に「近」と曰う。孔子曰く、「性相近し」と。孟子曰く、「性同じく然り」と。其の義は一なり。辞に緊漫有るのみ。[4]（原漢文）

履軒は、性を朱子が言うように本然の性・気質の性と分けずに、本然の性のみだと考えており、気質の性は認めていなかった。したがって、わざわざ本然の性という必要もなく、ただ性とのみ言えば良いという考えだった。[5]竹山の性に対する考えはやや不明瞭だけれども、履軒と同様の立場だったのかもしれない。

上述のように、竹山は基本的には朱子の注解に従いつつも、『集註』の解釈に従わない事例も多く、個々の事例を検討する限りにおいては、『集註』に対する竹山の立場は是々非々だと言える。朱子学に対するこのような竹山の立場を周囲はどのように見ていたのか。

例えば、当時の大坂詩壇の中心的存在に混沌社（こんとんしゃ）があり、正式の社友とはならなかったようだけれども、竹山も混沌社に参加する儒者たちとの交流は盛んだった。なかでも、後の広島藩儒で後期朱子学派の中心人物になる頼春水とは、春水の婚礼の仲人を務めるなど親密な交際をしていた。その頼春水は『師友志（しゆうし）』において、竹山・履軒の兄弟について、「〔中井〕兄弟　皆な山斗の望有り。但だ其の学　程朱を信じて純ならざるを恨みと為す」（原漢文）と述べている。[6]すなわち、春水から見れば、竹山・履軒兄弟は純粋な朱子学者とは見えなかったということである。確かに『論語断』を見る限り、竹山は基本的には朱子の解釈に従いつつも、実際には是々非々で『集註』に相対しており、朱子の説を墨守するわけではない。では、竹山は本当に純粋の朱子学者ではなかったのだろうか。そうではあるまい。竹山は、朱子学の最も重要な立場を踏みはずさないという意味において純粋の朱子学者だったのではないか。以下、項を改めて竹山の儒者としての基本的立場を検討することにしたい。

三、竹山の基本的立場
―闇斎・徂徠・仁斎との比較―

竹山関連の資料のひとつに『竹山先生国字牘』がある。これは竹山が知人や弟子から問われた学問や政治・経済などの問題について答えた手紙の集成である。[7]そこで竹山は、次のように言う。

愚ハカネテ臆見アリテ、朱説ニ従ガハザルコトママアリ、タダ護園ノ非スル所ニ於テハ、ソノ当ヲ見ザ

ルノミ、何ントナレバ本領既ニ大ニ異ナルト、一々朱説ニ反セント強テ異説ヲ立ル病痛アルベシ、愚ノ篤ク程朱ヲ信ズルハ、全体本領ノ所ニアリ、経説ニ於テハカツテ回護セズ、モシ後儒ノ説ニ取コトアリテ、実ニ経旨ニ叶ヒナバ、程朱モ地下ニテ喜アルベシ、豈我説ニ畔(そむ)クトテ怒アルベケンヤ、コレ大賢ノ心ナリ、(『竹山先生国字牘』上巻、二十八葉裏　答斎藤高寿)

ここで竹山は、「愚ノ篤ク程朱ヲ信ズルハ、全体本領ノ所ニアリ、経説ニ於テハカツテ回護セズ」と述べているから、細かい経説について程朱と多少は距離があったとしても、彼自身が基本的に朱子学を奉じる立場だと意識していたことは明らかである。とするならば、彼の言う「全体本領ノ所」とは具体的に何をさすのかを明らかにする必要がある。

竹山の「全体本領ノ所」について述べる前に、荻生徂徠・山崎闇斎・伊藤仁斎に対する竹山の批判を見ておく。彼ら諸儒と比較することで竹山の儒者としての基本的立場もおのずから明らかになると考えるからである。

例えば、陽貨篇（九、六表）「子曰く、古者(いにしえ)　民に三疾有り、今や或いは是れ之(これ)亡きなり。古の狂や肆、今の狂や蕩。古の矜や廉、今の矜や忿戻。古の愚や直、今の愚や詐なるのみ」の有名な箇所である。以前と現在とを対比しつつ、現状を批判する内容であり、同箇所の『論語断』に、「善按ずるに、今の徂来(ママ)の学を称する者は蕩の狂、山崎の学を称する者は忿戻の矜、神道の学を称する者は詐の愚なり」とある。ここから竹山が徂徠・闇斎・神道を批判的に見ていることがわかる。それでは竹山が諸儒をどのように見ているか、より詳細に検討してみる。

まず、山崎闇斎に対する批評である。上述の『竹山先生国字牘』所収の「答斎藤高寿」に、竹山は以下のように述べる。

山崎ノ一派ノ如ク、片言隻辞ノ程朱ヲ犯スノアレバ、怒顔盛気ソノ当否ヲ繹(たず)ヌルヲ待ズ、概シテ異端邪説トスルハ、愚ツネニソノ隘ヲ議シテソノ陋ヲ笑フ、(『竹山先生国字牘』上巻、二十八葉裏)

竹山も基本的には朱子学尊重の立場だから、そこは闇斎と敵対する立場ではないはずである。しかし、闇斎の場合、「片言隻辞」、すなわち、一言一句でも程朱の考えに背くものであれば、「異端邪説」として強烈に批判する。闇斎の厳格な朱子学墨守の立場は夙に有名だけれども、竹山の眼から見てもそれは行き過ぎだと映っていたようである。さらに竹山は『竹山先生国字牘』所収の「建学私議」において、闇斎について次のように言う。

山崎氏ハ篤ク程朱ヲ信ジ、浮文ヲ削リ実学実行ヲ主トスルユヘ、大ニ朱子ニ功アリトモ申スベケレバ、コノタビノ教導ニハ宜カルベキコトニ候ヘドモ、苦々シキコトハ一種ノ僻見コレアリ、敬義直方ノ訓ヲアナガチニ拘泥シテ、本旨ヲトリ失ヒ、諸事イカメシクノミナリユキ、風ナキニ波ヲ起スコトニナリ忿戻ノ矜ニ陥リ候、（『竹山先生国字牘』下巻、四十一葉裏）

「建学私議」とは、京都の公卿高辻胤長（たかつじたねなが）の要請によって、竹山が一七八二年に提出した京都と大坂との学校建設に関する提議の書で、江戸の昌平黌に対して京都や大坂にも官学を建てることを建言するものである。ここで竹山は闇斎の朱子学尊重の立場は認めながらも、闇斎が『周易』坤卦文言伝の「敬以て内を直くし、義以て外を方にす」の語にこだわり、結果的に偏った見解に陥っていると批判する。基本的に朱子学を踏みながらも個別の術語の解釈にこだわることなく、是々非々で対応していたのが竹山の立場だったことからもわかる通り、たとい朱子学尊重の立場は共通していても、一言一句の解釈にこだわる闇斎の立場と竹山の立場とは相容れないものだった。

次に荻生徂徠に対する竹山の見解はどうだろうか。上述の「答斎藤高寿」に、「愚ハカネテ臆見アリテ、朱説ニ従ガハザルコトママアリ、タダ護園ノ非スル所ニ於テハ、ソノ当ヲ見ザルノミ、何ントナレバ本領既ニ大ニ異ナルト、一々朱説ニ反セント強テ異説ヲ立ル病痛アルベシ」とあった。竹山も朱子の見解を墨守するわけではないけれども、徂徠は朱子の説に無理矢理にでも反対しようとする説、すなわち、反対のための反対の説ばかりであってその弊害は大きいと言う。懐徳堂は、五井蘭洲の『非物篇』以来、徂徠学批判を基本的立場としており、竹山にも『非徴』の著があるから、竹山も懐徳堂学派の反徂徠の立場を踏んでいる。また、「建学私議」に次のように言う。

学術ハ申上候迄モナク朱学ノ外ハコレナキコトニテ候、陸王ヲ始メ後世サマザマ一見所ヲ立タル儒家モ候ヘドモ、往々禅学ニ落、或ハ管商刑名ニ流レテ、大ニ聖学ノ本意ヲ失ヒ候ヤウニ相ナリ候、但シ宋季元明ヨリ吾邦先輩ニ至リ、経説文義ナドニ於テ、各見所アリテ旧説ヲ守ラザルモ多ク互ニ得失長短モアリ、実ニ前賢未発ノ旨ヲウルモアルベケレバ、参考ニ備ヘ、疑フベキヲ闕テ、ソノ従フベキニ従ツテ可ナリアナガチイヅクマデモ旧説ヲ回護執拗スルニハ及ブマジ、コレハミナ同中ノ異ニテ、コノ従違ヲ以

ニワカニ朱門ニ畔クトハスベカラズ、タダ全体ノ所、程朱ヲハナレタルハ、ミナ邪逕曲蹊ト思シ召ルベク候、我邦近世ニ至リ、程朱ヲ罵リ、思孟ヲ詆リ、別ニ新奇ノ説ヲ立テ実行ヲ廃シ、虚文ニハ大ニ人心ヲ壊リ、士風ヲ害スルヤウニナリ来リタルハ、荻生大宰ヲ魁トス、コレラノ学徒ハ、一日モ教導ノ任ニハ決シテサシヲクベカラズ候、(『竹山先生国字牘』下巻、四十一葉表)

引用の最後部に、程朱や子思・孟子を批判して新奇の説のみを立てて弊害を助長する儒者の代表格として徂徠とその弟子の太宰春台とを挙げている。「禅学ニ落」とあるのは、陽明学に対する批判、「管商刑名ニ流レテ」というのは徂徠学派に対する批判である。「管商刑名」とは法家思想をさしており、政治の治術のみに拘泥する儒者を批判する語である。このなかで朱子学を「聖学」と呼んだり、「学術ハ申上候迄モナク朱学ノ外ハコレナキコト」と述べたりしていることからもわかる通り、竹山の朱子学尊重の立場は明確である。したがって、竹山が徂徠学派を「管商刑名」と批判しているのは、本来の儒家としては政治治術のみでは不十分だと彼が考えていたことを示している。その点については竹山の言う「全体本領ノ所」の内容とかかわっており、後述する。ともあれ竹山の徂徠学派に対する考えの梗概はここからうかがうことができよう。

最後に仁斎に対する竹山の見解である。同じく「建学私議」に、以下のように言う。

伊藤氏ノ学ハ、程朱ヲ排スルコト甚シク、拘滞執拗ノコト多ク、覇術功利ニ帰シ候病ゴザ候ヘドモ、一体ニ平実ナル風アリテ、陳熟緩慢ニ落ルトモ、山荻二家ノ如キ大害ハナク候ヘバ、人品才学サヘ揃ヒ候ハバ、時ニヨリ乏キヲ受候ホドノコトハ苦シカルマジク候、(『竹山先生国字牘』下巻、四十二葉表)

仁斎に対する竹山の舌鋒は、闇斎や徂徠に対するものに比べて鋭くない。確かに仁斎の程朱排斥は激しく、また、徂徠と同様に「覇術功利」、すなわち、政治治術の方向のみに拘泥していると竹山は批判している。しかし、全体的に見て「平実ナル風」があり、「人品才学」さえそろっていれば参考に資する点も存すると述べている。ただ、「覇術功利」と仁斎の学が評されるのは、「管商刑名」と批判される徂徠と同じ系統の学問だと竹山が仁斎の学を見なしていたことを示しており、儒者として政治治術のみに拘泥するのは正しい方向ではないとする竹山の基本的立場がうかがえる。以上、闇斎・徂徠・仁斎と比較するところから、竹山の朱子学尊重の立場が明らか

になった。それでは竹山の言う朱子学の「全体本領ノ所」とはどのようなものだろうか。以下に章を改めて検討する。

四、竹山の「全体本領ノ所」

先に引いた「建学私議」のなかで、竹山は「学術ハ申上候迄モナク朱学ノ外ハコレナキコト」と述べたり、朱子学を「聖学」と呼んだりしていることから、彼の朱子学尊重の立場は明らかである。『竹山先生国字牘』からもう一例挙げてみよう。

程朱始テ六経語孟ニ就テ、聖学ヲ推明アリシヨリ、天下ノ学風一変シテ学者大寐ノ新タニ醒カ如シ、後世ニ至、又異説紛々門戸ヲ分ツヤウニナリ、…我邦近来堀川護園ナド、又一新機軸ヲ出シテ、聖門ノ学先王ノ道ココニアリト唱ヘ、争テ程朱ヲ貶駁スルヤウニナルハ、可否ハ姑クコレヲヨキ、ソノ主意大ナル違ヒノヤウナレトモヨク見レバソノ聖道聖学ト云フコトニ心付タルハ、ミナ程朱ノ賜ナリ、（『竹山先生国字牘』上巻、二十六葉裏　答斎藤高寿）

仁斎の堀川学や徂徠の護園学派が「先王ノ道」は我にありとして程朱を批判しても、結局、彼らが「先王ノ道」に思いを致すようになったのは「程朱ノ賜」だと竹山は言う。ここから竹山の程朱尊重の立場は明らかだけれども、上述したように、「愚ノ篤ク程朱ヲ信ズルハ、全体本領ノ所ニアリ」と言う「全体本領ノ所」とは、具体的にどのような内容をさすのだろうか。竹山は、「再答斎藤高寿」において以下のように述べる。

皆以テ学者脩己治人ノ準的トスル所、先賢ノ述具レリ、タダ徂来ノ所謂先王ハ特ニ以テ学者ヲ恐嚇スルノ具トシテ、ソノ実ハ管商功利ノ術ニ墜在シ、誠意正心明善誠身ノ訓ヲ廃シテ徒ラニ経済ヲ談ズ、コレ豈先王ノ教ナランヤ、コレヲ名付テ先王ノ標榜ト云ナリ、（『竹山先生国字牘』上巻、三十一葉表）

竹山は「脩己治人」こそが儒者としての目標だと述べる。これは、個人的な修養に始まりそれを全体的な政治に及ぼすこと、すなわち、脩身に始まり平天下に至るいわゆる『大学』の八條目の立場である。また、『論語』憲問篇に、子路が君子について問うたときの答えとして孔子も、「己を脩めて以て百姓を安んず」と述べている。つまり、「脩己」だけでもなく「治人」だけでもない、双方ともに尊重する立場である。竹山にとって、これが本来あるべき儒者の立場であり、朱子学の「全体本領ノ所」だったのである。竹山の「脩己治人」重視は、例え

ば、懐徳堂の門聯が「力学以修己、立言以治人」となっていたことからもうかがえる。[8]

ただ、「脩己治人」を目的とすると言っても、それは儒者としていわば当然の目標で、竹山の思想の特徴とは言えないのではないかとも考えられる。確かに儒者として誰でも「脩己治人」を説かない者はいないだろう。しかし、上述のように仁斎や徂徠の学を「覇術功利」や「管商刑名」と批判して、政治治術のみに偏るのは本来あるべき儒者ではないと竹山は考えていた。竹山は、本来あるべき儒者として「脩己」を決しておろそかにしてはならないと考えていたからこそ、朱子学でも強調される「脩己治人」の語をあえて掲げたのではないだろうか。

また、宋代以降に科挙制度が整備されるにつれ、儒者が士大夫として自分の能力を実際の政治の場で発揮する機会をもつことのできた中国と相違して、江戸期の日本では儒者が政治に関与することは難しかった。そもそも儒者の立場そのものが当時はまだ曖昧な位置づけの周縁的身分だった。[9] そのような状況のなか、松平定信が老中となり、彼の来坂時には、竹山と直接会見して、その結果、竹山の経世に関する見解をまとめた『草茅危言』が献上された。その後、定信の寛政の改革へつながってゆくわけだけれども、竹山にとっては、儒者としての本分を果たす千載一遇の機会を得たという意識が強かっただろう。そのときに本来あるべき儒者、すなわち、脩己を治人に及ぼす儒者のあり方について、どれほど強調してもしすぎることはないと竹山は考えたのではないだろうか。

江戸期は、ある程度、身分制が固定化しており、それは竹山当時もそうだっただろう。特に儒者は周縁的身分としてその立場が曖昧だったから、そのような身分的制約を超えて儒者の立場を確立し、その能力を発揮するのだという使命感に竹山は燃えていた。例えば、『竹山先生国字牘』所収の「与今村泰行論国事」に、次のように言う。

君子ハ思フコト其位ヲ出ズ、又ハ其位ニ在ザレバ其政ヲ謀ラズトモ承ハリタレバ、愚拙ノ身分トシテ藩国ノ事ヲ議スベキニハ非レドモ、…サキニ亜大夫織衛君ヨリモ竿牘懇々ニテ執事ト商量ヲ惜マザレトノ来喩、カタガタ以テ固辞隠黙スベキニ非ズ、故ニ不案内ノ事ナガラ、シイテ鄙見ノ一二ヲ述テ責ヲ塞クト云ノミ、アニ采覧ニ足ランヤ、（『竹山先生国字牘』上巻、二十二葉表～二十二葉裏）

今村泰行なる人物は未詳だけれども、恐らくある藩の藩主に近い高位の武士だろう。竹山は、『論語』憲問篇

の語を引きつつ、自分の身分としては本来、藩の政治について議する立場ではないけれども、たっての仰せから鄙見を述べる云々と述べている。儒者としての自分の身分は必ずしも高くないという自覚をもちつつ、それでもなお、政治に参画しようとする竹山の使命感をここからうかがうことができる。もう一例挙げれば、上述の門聯の解説に竹山は次のように言う。

…力学…修己…立言…君子モ時ニ逢ザレバ、ソノ業ハ修身斉家ニ止マリ、治国平天下ノ事業ハ世ヲ隔テタル事ナレドモ、書ヲ著ハシ言ヲ立テ道ヲ明カニシ世ヲ曉スノ功ハ、上位ニ立テ政教ヲ施スニモ伯仲スルモノアリ、思孟程朱ノ道ヲ伝フル皆是ナリ、我邦ハ貴賤ノ分定マリタル国風ユヘ、閭閻ノ士（庶民）イカナル才徳アリテモ、終身沈淪シテ一民ヲ得テ治ムベキヤウモナケレドモ、カノ愚者一得ノ寸志ヲ述テ、世ニモ伝ヘ後ニモ貽スニ、モシ取ベキ所モアレバ、是ニ因テ興起奮発スル者モ少ナカラザレバ、コレ言ヲ立テ人ヲ治ムルナリ、コノ一事ハイカホド時ニ遇ヌ身ニテモ、随分己レガ任トシテ譲ルマジキコトナリ、（『竹山先生国字牘』下巻、二葉表～二葉裏）

「閭閻ノ士イカナル才徳アリテモ、終身沈淪シテ」の語から、庶民として竹山が身分制の制約に対して、ある種の鬱憤を抱いていたことがわかる。そのなかで、竹山は儒者の本分を果たすための職務として官学の教授を構想していた。具体的には、官学としての懐徳堂の拡充をめざして、そこに儒者としての活路を見出そうとしていた。懐徳堂第四代学主として、父の中井甃庵の代からの悲願だった官学としての懐徳堂の拡充を自分の代で実現するのだという一種の高揚した気持ちが竹山にはあったと思われる。上述の「建学私議」に以下のように言う。

教授ノ任ハ、地下ノ賢者ヲ御択ミ遊バサルベキノ旨、御尤ニ存ジ奉リ候、コノ事第一ノ重事至切至要ノコトニ候ヘバ、中々貴賤ニ拘ハリ候ヤウノコトニハナク候、去ナガラ真才実徳ノ人、ニワカニ得ガタキコト、古今ノ通患ニテ候ヘバ、何分造立ニ及ビ候ハバ、マヅ愚拙兄弟ニ罷出候ヤウニ尊命ヲ蒙リ、恐レ入候仕合ニゴザ候菲徳浅才ノ身分左ヤウノ任ハ寔ニ慙入候義、且マタ遠方ニ罷在候コトユヘ、御間ニモ合カネ候勢ニゴザ候間カタガタ以固辞仕ルベク候ヘドモ、此任一日モ欠可ラザルノコトユヘ、隗ヨリ始ムルノ思召ニテ、ソノ人ヲ得ラレ候マデノ内、当分ノ義ニテ候ハバ、クリ合セ折々罷出可也ニ相務申ベキカニ候ヘドモ、同ジクハソノ任ニアタリ候人ヲカネテ御択ミ遊バサレタク候、（『竹山先生国字牘』下巻、

四十葉表）

教授には身分に関わりなく、才能があり人徳も兼ね備えた人材を当てるべきだと竹山は言う。ただし、そのような優秀な人材はなかなか得られるものではないから、優秀な人材が得られるまでの当分の間、我々竹山・履軒兄弟を教授としてしばらく任用してもらってもかまわないと竹山は述べる。一見謙虚に見える竹山のこの言辞の裏側に、自分たち兄弟こそが官学の教授としてふさわしいという強烈な自負心が隠されていることは明らかだろう。さらに竹山は「建学私議」の続く部分に、次のように言う。

教授ノ職ハ、徳行学術文才全備ノ人ニコレナクテハ相済申サズ候、文才ノミニテ徳行ナキハ申ニ及バズ、害アリテ益ナク候又徳行アリテモ才学足ズ候テハ、一分ヲ守ルニハ事済候ヘドモ、人ヲ教導スルニ於テハ行届申サズ候、尤コノミハ三筋ニ分レタルコトユヘ、夫々一筋ヅツ御吟味遊バサルベク候、ソノ択ミ方、左ノ通リニゴザアルベキカト存ジ奉リ候、（『竹山先生国字牘』下巻、四十葉表～四十葉裏）

竹山としては、官学の教授は「徳行学術文才全備ノ人」でなければならないと考えていた。すなわち、「徳行」と「学術文才」とを兼ね備えた人材である。「学術文才」だけでは弊害があることは言うまでもなく、「徳行」のみでも人を教導するには不十分だと竹山は言う。特に、「学術文才」のみでは不十分だという指摘は、「覇術功利」や「管商刑名」の語を用いて政治術のみにとらわれていると仁斎や徂徠の学を批判して、「脩己」を「治人」に及ぼすような、本来あるべき儒者像を構想していた竹山の基本的立場を反映するものだろう。

おわりに

竹山の『論語断』を材料にして彼の経学研究を概観すれば、基本的に朱子の解釈を踏襲しつつ、個々の事例においては柔軟に是々非々で対応しており、山崎闇斎のように朱子の学説を墨守するといった注釈の立場ではなかった。しかし、竹山自身が言うように、それは朱子の立場に従わないことにつながるのではなく、朱子学の「全体本領ノ所」を守りつつ、注釈するものだった。

では、「全体本領ノ所」とは何か。それは「脩己」と「治人」との双方に通じることだった。したがって、「治人」すなわち、政治治術のみに拘泥して「脩己」をおろそかにしていると竹山には見えた徂徠や仁斎の立場を竹山は批判する。逆に「脩己」、すなわち、道徳的内容を説く

だけでも不十分だと竹山は考えていた。例えば、竹山に『経済要語』という著述がある。これは竹山が『論語』為政篇「為政以徳」の語、『荀子』君道篇の「有治人無治法」の語、『礼記』王制篇の「量入以為出」の語についてそれぞれ解説したものであり、その「為政以徳」の項に、以下のように記されている。

世の君相たる人、国家の大任を舞台の芸の如くに心得ては、大なる繆迷なるべし、世の儒を以て称する人も、其家に居るを見るに、不孝不悌にて、俗人同前に放蕩不検衽席不正身持を以て講席に登り、高く性命道徳を談じ、稠人広座に経済礼楽をののしることなど、皆舞台の一芸なり、君相たる人のよき誡なるべし。(10)

このように国全体に対する意識が希薄で、机上の空論の道徳や礼楽について高説をかざすだけの町儒者に対して、竹山は強烈な批判の語を投げかける。懐徳堂自体も初代学主の三宅石庵のころには、町人のための学問所という意識が強かったけれども、竹山自身は、懐徳堂の官学化をみずからの使命と考えて、町人の学問所の立場から脱することをめざしていた。「脩己」のみを説く町儒者でもなく、「治人」のみにとらわれる徂徠らの古学でもなく、「脩己」を「治人」に及ぼす儒者、すなわち、本来あるべき儒者像を描くのが朱子学であり、そのようなあるべき儒者になりたいと竹山は考えていた。この竹山の強い願望が懐徳堂の官学化への熱意へと竹山のなかで昇華されていたのではないだろうか。

注

(1) 他にも『論語雕題』に見えて『論語断』に見えない蘭洲の説として、憲問篇（七、十八裏）「洌庵先生云、丘何為句絶、前章夫子何為可以例」、衛霊公篇（八、三裏）「洌庵先生云、如問孝、不問為孝。而夫子之対、皆以為孝之方、故問仁、問為仁、無殊義」、微子篇（九、十三表）「蘭洲先生云、其斯而已矣一句、宜在無可無不可之下、誤写在此。即与可謂云爾已矣一例」などの例がある。なお、『論語雕題』の書き入れのある両銭堂刊『四書集註』と『論語断』の書き入れのある六順堂刊の『四書集註』とは、文字の様相がやや相違しているけれども、ほぼ体裁は同じで、葉数も対応している。

(2) 懐徳堂関連の文献は、懐徳堂文庫以外に、大阪府立中之島図書館が多く所蔵する。『論語』に対する五井蘭洲の注解は大阪府立中之島図書館に所蔵されているけれども、中之島図書館所蔵の『学庸論語紀聞』、『蘭洲先生論語解』、『蘭洲先生論語精義筆記』はすべて漢字片仮名混じり文であり、漢文のみで記された注解は所蔵されていない。

（3）張彦陵『四書説統』からの引用は、『論語断』では「説統曰」、『論語雕題』では「張彦陵云」とあるけれども、本表では張彦陵の項にまとめて記した。同じく蔡虚斎『四書蒙引』も『論語断』では主に「蒙引曰」、『論語雕題』では「蔡虚斎云」、林次崖『四書存疑』も『論語断』では主に「存疑曰」、『論語雕題』では「林次崖云」となっているけれども、本表ではそれぞれ蔡虚斎と林次崖との項にまとめて記した。

（4）実際には『孟子』のなかに「性　同じく然り」の語は見えない。

（5）履軒の性論については、伊藤仁斎・荻生徂徠の性論と比較しつつ論じた拙稿「中井履軒の性論―伊藤仁斎・荻生徂徠の所説と比較して―」（『懐徳堂センター報２００７』、二〇〇七年）を参照のこと。

（6）『日本儒林叢書』第三巻、史伝書簡部所収。

（7）『竹山先生国字牘』の原本は懐徳堂文庫の所蔵で、全八十四篇（内十一篇を欠く）。全九冊。明治四十四年、懐徳堂記念会発行の『懐徳堂遺書』に、原本から三十篇を選んで活字翻刻したものを収めており、本稿ではそちらを底本とした。なお、底本には変体仮名や合略仮名が用いられているけれども、引用に当たっては片仮名に改めた。

（8）『竹山先生国字牘』下巻、二葉表に「門聯　外門ヨリ入テ講堂ヘ通ルベキ庭ノ中門ノ聯ナリ」と述べたうえで、竹山は門聯について解説を加えている。なお、竹山筆で竹製のこの門聯は、現在、懐徳堂文庫に「入徳門聯」として所蔵されている。

（9）阿部吉雄「江戸時代儒者の出身と社会学的地位について」（『日本中国学会報』一三号、一九六一年所収）、渡辺浩「儒者・読書人・両班―儒学的「教養人」の存在形態―」（『東アジアの王権と思想』東京大学出版会、一九九七年所収）などを参照のこと。

（10）『経済要語』（滝本誠一編『日本経済大典』第二十三巻）五百八十八頁。

（本論考は、平成二十三年度科学研究費補助金・基盤研究C「懐徳堂学派における教育思想の研究―その経学思想と経世思想との融合―」〔研究代表者・藤居岳人〕による研究成果の一部である）